

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

第 125 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成13年9月21日

シ メ



2000. 5. 7 清田山部川 撮影者 佐藤 勇

〒004-0847 札幌市清田区清田7条3丁目16-2



も く じ

私の探鳥地 (40) 砥石山登山道・八垂別の滝コース	白澤 昌彦	2
浦幌・トイトツキの空の下	浦幌野鳥倶楽部 久保 清司	3
クッチャロ湖の観察シーズン紹介	クッチャロ湖水鳥観察館 小西 敢	6
シベリアオオハシシギ観察報告	山田 良造	8
北海道における繁殖期のニューナイスズメの分布	藤巻 裕蔵	9
探鳥会ほうこく		10
探鳥会あんない		15
鳥民だより		15

はったりべつ
私の探鳥地 (40) 砥石山登山道・八垂別の滝コース
 白澤 昌彦

この探鳥地は私が、夏鳥のやって来る春一番の探鳥地の一つとして、いつも一人で楽しんでいる場所である。西区平和の宮城の沢も大変面白いところで毎年行っていますが、こも山歩きの好きな私にとっては、自宅からも近く短い時間で結構な数の鳥と長い冬の間、雪の下に眠っていた山野草の力強いはぐぐみも併せて楽しんでいます。

市街地から探鳥地へは、国道231号を南進し、五輪橋通と交差するスーパーサティ藻岩店前を右折し盤溪に抜ける道路を2km程走ると左手に中の沢会館・老人保健施設グラネの看板があり、そこで左折し道なりに南進1km程しますと、右手にごみステーションがあり、砥石山登山口と書いた小さな看板がありそこを右折し、私道をとおり300~400メートルの所が登山口でかなり広い駐車場があります。ここから見始めたのでは楽しみは半減しますので、看板のところを右折し少し進んだところで邪魔にならないよう駐車させてもらっています。入り口右手の家の人がいる時は、一言ことわった方がよいでしょう。

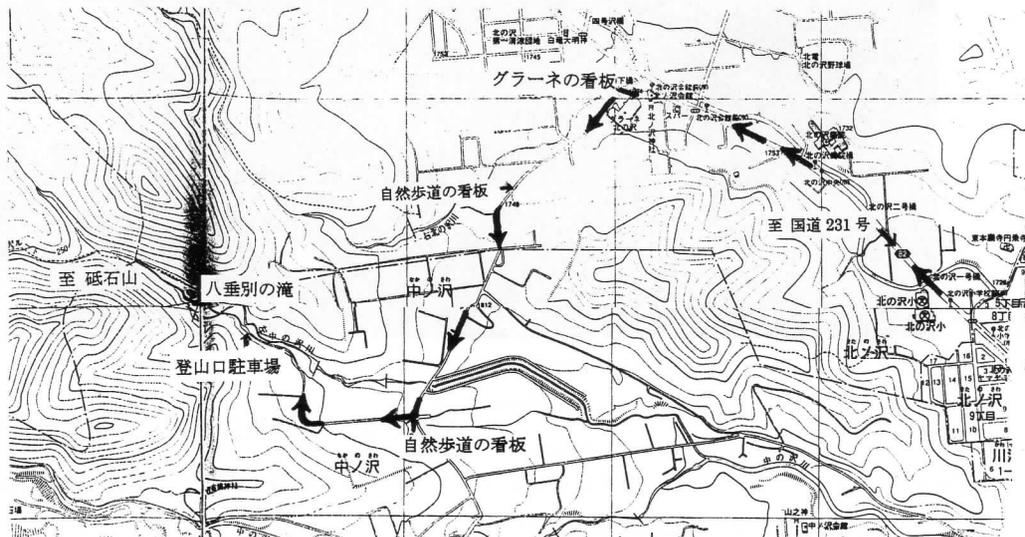
この場所は、例年5月中旬に訪れており、畑と疎林が広がっていて、いろいろな鳥の声が聞こえてきますので、結構時間をかけて見ていきます。畑にはカワラヒワ、アトリ、ホオジロ、ベニマシコが、山側ではツグミ、マミチャジナイを見たこともあります。

登山口に近づくと川があり、キセキレイ、マガモがおり、駐車場の先の小公園みたいなところは確実にアカハラカクログミがいますので注意して進みます。この辺りから森林性の鳥が見られはじめ、ミソサザイ、センダイムシクイ、コルリ、オオルリ、ヤブサメ、コマドリなどが姿をみせ、エゾムシクイは何故か姿を見ることができます。

登山道には、ツグミ類が餌とりをしているので前方に注意が必要で確実に姿を見ることができます。

過去の探鳥でめずらしいものとしては、アオシギ、ビンズイ、ノゴマ、ジュウイチ、カワガラスなどが出ており、2~3時間の探鳥で一番種類が出たときは35種で少ないときでも23種と結構楽しめるところです。是非一度、散策気分楽しんでみてはいかがでしょうか。

〒064-0917 札幌市中央区南17条西18丁目2-20



浦幌・トイトッキの空の下

浦幌野鳥倶楽部 久保清司

浦幌町の概要

十勝支庁管内の中心地帯広市より国道38号を釧路市に向かって約50km、十勝川の下流部に位置する浦幌町は、南北に53.5km東西に25.7kmと細長い地形を成し、729平方kmと広大な面積を有しております。

面積の約74%は森林で、町内で一番標高のある山でも710km程度しかない概ね緩やかな山林で、広葉樹を主体とした林と、針葉樹の混じった天然林が約64%、カラマツ・トドマツ主体の人工林が約36%となっております。しかし、天然林も大径木の伐採が進み原生林と呼べる自然林は皆無の状況となっております。そのため、森林の保水力は弱く雨が降るとすぐ増水しますが、普段は水量がわずかしかないため魚影は薄くなっています。町の中央部を北から南に流れる浦幌川は延長約100kmに及び、河口近くで浦幌十勝川と合流して太平洋に注ぎますが1町のみを貫流する全国まれに見る河川であります。耕地面積は約1万haありますが、南部は太平洋の影響を受けて夏季には濃霧の発生により冷涼な気候のため酪農を主体とした農業地帯であり、内陸部は大陸性気候により小麦、馬鈴薯、甜菜、豆類を中心とした畑作農業地帯となっております。

町内での野鳥観察記録は、1990年5月浦幌野鳥倶楽部を結成してから会員により確認されたものだけで、特別天然記念物に指定されているタンチョウ、コウノトリ、アホウドリをはじめ、天然記念物のクマガラ、コクガン、マガン、ヒシクイ、オジロワシ、オオワシなどを含む18目51科266種となっております。一町内でこれだけ多くの野鳥を観察できたのは、倶楽部の結成より観察者が増えたこともありますが、伐採は進んでいますが森林あり、未改修の小河川あり、河川に沿って耕作地や放牧地が広がり、十勝川下流域には河跡湖や湿原・原野が点在しており、そして22kmの海岸線を有するなど自然環境の変化に恵まれているためと想います。

浦幌町豊北地区の探鳥ポイント

1. 三日月沼周辺

浦幌町の南部、十勝川と浦幌十勝川下流域は、かつては広大な湿原地帯でしたが、戦後開拓者が入植した地域です。河川沿いの一部沖積土を除き大半の地域は泥炭層の劣悪な土壌と、1970年代までは毎年繰り返される河川の氾濫、夏期に発生する濃霧により開拓者は甚大な被害を受け続けたため、十勝川の切り替えを含めた河川改修工事や海岸線に沿って防霧林の造成が大規模に進められました。今でも築

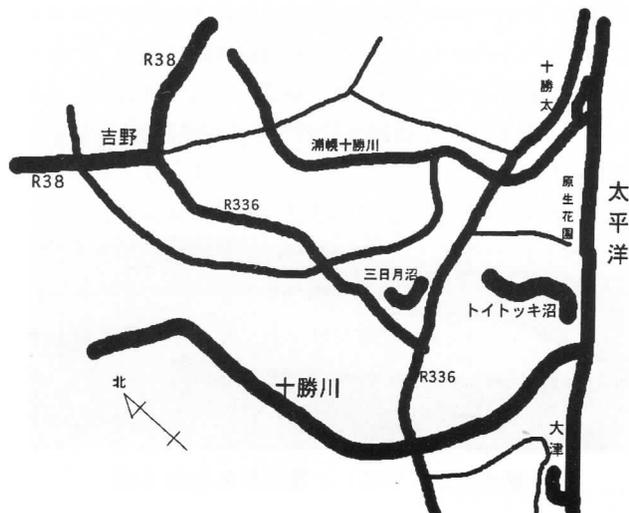
堤の整備工事や排水工事、防霧林の造成工事が続けられているため、昔の湿原地帯の面影が残っているのは地域内に点在している旧河川や河跡湖くらいのものであります。

国道38号で浦幌町内に入ると最初の市街地吉野で国道336号と合流しますが、この国道336号を広尾町の方に向かうと(交差点を右折)約6kmで豊北地区にある河跡湖「三日月沼」があります。この沼は面積10haと狭いのですが当地方に渡りの時期に飛来するガン類やオオハクチョウ、カモ類の貴重なねぐらとなっております。1999年に沼の周辺も含めて銃猟禁止地区に指定されたので、日中も安心して休める沼となりました。この沼の主役はなんと言ってもガン類です。

例年9月中旬にはオオヒシクイの一行が渡ってきます。沼に氷が張る11月下旬まで最盛期にはオオヒシクイで約4千羽、マガンで約3千羽を超えますし、これまでカリガネ、サカツラガン、ハクガンなども観察されています。ハクガンは昨シーズンは8羽も飛来してくれました。オオハクチョウやカモ類も多数観察することができます。

国道から沼まで約200m程ありますが、道路はついておりませんので国道からの観察をお勧めします。交通量は少ないとはいえくれぐれも交通事故には注意を要します。国道縁に車を置き沼の淵まで徒歩で歩くこともできますが、収穫の終わった牧草地といえども個人の畑の中を通行しますので所有者に断わらないで入りこむことは慎んでください。

沼一面に繁殖する「ヒシ」は瞬間に食べ尽くされていますので、日中ガン類は、収穫の終了したデントコーン(乳牛の飼料)畑、馬鈴薯畑、秋蒔き小麦畑、牧草地や放牧地で採食しておりますので、沼の半径3km周辺の舗装道



路をゆっくり走って捜してください。

越冬地に渡っていたガン類は3月中旬まだ畑には残雪があり餌の確保もままならない時期に早くも飛来し、雪の上で体力の消耗を防ぐため1日中うずくまって雪解けを待っています。4月上旬には、沼の氷も溶け牧草地の雪も溶けると繁殖地に向けての最後の体力づくりに忙しくなります。4月下旬夏鳥の渡来がピークを迎える頃繁殖地をめざします。

沼周辺にはわずかですがヤナギが生育しヨシ原もありますので、カイツブリ、アカエリカイツブリ、マガモ、ノゴマ、シマセンニュウ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、オオジュリン、ノビタキ、ベニマシコなどが観察できます。また近くで繁殖していると思われるタンチョウ、アオサギ、オジロワシ、チゴハヤブサ、チュウヒ、ツバメ、ショウドウツバメなどが餌場として利用する姿を観察することができます。秋から冬期間はオオワシ、ノスリ、ハイイロチュウヒ、ハヤブサ、コチョウゲンボウなどの猛禽類が観察されます。年により変動はありますが、除雪によって顔を出している道端にツメナガホオジロやユキホオジロが数羽から数十羽、アトリやマヒワ、ベニヒワ、ハギマシコなどが数羽から数百羽単位の群で見られることもあります。

2. 原生花園

太平洋沿岸に位置した原生花園とトイトッキ沼は、三日月沼より南東へ約3km十勝川河口と浦幌十勝川河口の間に位置しています。両河口の間は約4kmありますが、この間は砂丘を地盤とした野生植物の群落地となっています。群落地の一部約6ha程は「トイトッキ浜野生植物群落地」として道の天然記念物の指定を受けています。6月からシコタンタンポポ、マイズルソウ、ヒメイズイ、ハクサンチドリ、キジムシロ、センダイハギ、ヒオウギアヤメ、ハマナス、ハマエンドウ、エゾカンゾウ、エゾノコリンゴ、ノハナショウブ、ガンコウラン、フレップ、ノコギリソウ、コウボウムギ、ハマボウフウ、リンドウ等々高山性の草花も



十勝太の沼(手前)と豊北原生花園(奥)

合わせて200種を越える花々が咲き乱れる原生花園となります。海岸線より内陸に約200m程の所、砂地と泥炭層にまたがり幅員200mを超える幅の防風・防霧保安林が1960年から造成されております。植栽されている樹種は、グイマツ、トドマツ、ストロブマツ、チョウセンゴヨウマツ、カシワ、ヤナギ、イタヤ、タモなどとなっています。防風・防霧保安林と原生花園によって、オオジシギ、カッコウ、モズ、ヒバリ、ノゴマ、ノビタキ、コヨシキリ、エゾセン



シロハヤブサ 2001. 04. 01 豊北

ニュウ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、センダイムシクイ、オオジュリン、カワラヒワ、アオジ、ベニマシコ、キジバトなどが繁殖していると思われますし、近くで繁殖していると思われるツバメ、ショウドウツバメ、イワツバメ、アマツバメ、ハリオアマツバメなども時々姿を見せてくれます。秋から冬にかけては、オオモズやユキホオジロ、アトリ、マヒワ、ハギマシコなどの小鳥類、オジロワシ、オオワシ、ケアシノスリ、ノスリ、ハイイロチュウヒ、チュウヒ、ハヤブサ、コチョウゲンボウ、チョウゲンボウ、コミズクなどの猛禽類は毎年姿を見せてくれますし、シロハヤブサやシロフクロウ、トラフズクなども観察されています。また渡りの時期には、カラ類やミヤマカケスなどが防風・防霧林を利用して群れで渡るのが観察されます。

3. トイトッキ沼

原生花園に食い込むように河跡湖の「トイトッキ沼」があります。沼への道は、夏はいそ釣りやシジミ貝採り、野生植物の観察、キャンプに、冬はモトクロスやスノーモービルを乗り回したワカサギ釣りを楽しむ人がおおぜい訪れますので自然と車道ができています。普段はタンチョウの主要な餌場となっているほか、マガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモなどの淡水ガモだけでなく、ホシハジロ、ホオジロガモ、キンクロハジロ、ズダガモなどの海ガモやミコアイサ、ウミアイサ、カワアイサなどのアイサ類なども時季には数多く利用しています。またこの沼は、十勝川の河口部とつながっているため潮の干満によっ

てわずかですが干潟のできる場所があります。そのため海岸線を移動する鳥達にとって格好の休憩場所となっているようです。これまで数は少ないですがシロチドリ、ヒバリシギ、ウズラシギ、サルハマシギ、オバシギ、キリアイ、オオハシシギ、ツルシギ、アカアシシギ、コアオアシシギ、クサシギ、オグロシギ、オオソリハシシギ、ダイシャクシギ、ホウロクシギ、セイタカシギなど33種のシギやチドリのほか、アビや5種のカイツブリ類、アメリカコハクチョウ、クイナ、バン、オオバン、ダイザギ、チュウサギ、コサギ、ハジロクロハラアジサシなどが観察されております。またミサゴのダイビングが観察されたり、暴風雨の際には普段は沖に生息しているトウゾクカモメ類の避難場所(?)として利用されたり、見過ごすことはできないポイントの一つです。

4. 海岸線

十勝川と浦幌十勝川河口を含む海岸線は、鮭釣りの竿がずらりと並び釣り人の行き来する砂浜で、餌取りに忙しいメダイチドリやキョウジョシギ、トウネン、ハマシギ、ミユビシギ、キアシシギなどの常連に混ざり、ダイゼン、ハラシギ、エリマキシギ、タカブシギ、ソリハシシギ、オグロシギ、オオソリハシシギ、チュウシャクシギ、ツバメチドリなどいずれも群れは小さいですがシギ・チドリが観察されます。カモメ類では、ユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメ、カモメ、ウミネコ、ミツユビカモメなどが、冬期間海上では、アビ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、カンムリカイツブリ、クロガモ、ビロードキンクロ、コオリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、ウミウ、ヒメウ、ウミスズメなどが楽しめます。十勝川は河口部を除いて氷に覆われるので、氷上でワカサギ釣りを楽しむこともできます。また氷上で休むゴマフアザラシの姿を見ることもできます。寒風吹く中での観察ですから4輪駆動車で砂浜に出て車中からの観察をお勧めします。

5. 十勝太旧船着場

浦幌十勝川河口左岸に位置する十勝太市街地にある旧船着場は、1962年アメリカ軍(現在は海上保安庁管理)のロランC基地建設の際に地元漁民のための船着場として整備されましたが、その後、近くの厚内港・大津港が整備され交通の便も良くなったことや河口の漂砂対策のために河川改修が進み現在使用されていません。この旧船着場の水面は6haと面積は小さいですが、川や海との間にはわずかながらヨシ原もありますし、潮の干満によって干潟の現れる場所もあります。また周囲も含めて銃猟禁止区域となっているため水鳥類が安心して休める場所となっています。サギ類、カモ類、シギ・チドリ類、カモメ類をかなり近い距

離で観察できます。1999年6月には13羽のセイタカシギが、2001年6月にはムラサキサギ1、ダイサギ4、チュウサギ2、コサギ1の群れ(?)が数日間観察されるなど、目の離せない観察地となっています。



ムラサキサギ 2001. 06. 24 十勝太

おわりに

浦幌野鳥倶楽部は結成以来11年間、これまでに開催した探鳥会は143回を数えております。年間を通じて、留真温泉の奥に延長50kmにも及ぶ砂利道が続く道東スーパー林道沿線、そして1995年まで浦幌炭坑のあった炭山地域は、針広混合林が主体の森林でコノハズク、クマタカ、クマゲラ、セグロセキレイ、カワガラス、コマドリ、ミソサザイ、ルリビタキ、アオシギ、ヤマシギ、オシドリ、エゾライチョウなどが観察されますし、幾千世、時和、稲穂の各地域は広葉樹を主体とした森林のためヤマシギ、ヨタカ、フクロウなどが、136haの公園内に自然観察路が整備されております森林公園は、市街地に隣接しておりカラ類を中心に森林性の野鳥の観察場所となっております。このほか、厚内港から昆布刈石にかけての海岸地域は、河岸段丘が続き一部岩礁地帯もありますので、ウミウ、カモメ類、ホオジロガモ、シノリガモ、クロガモ、ノスリ、ハヤブサ、チョウゲンボウ、そして海水を飲みにくるアオバトなども観察できます。これら数ある観察ポイントの中からこの度紹介しました豊北地区は、一番多く足を運んでいる地域でありこれまでに210種類以上もの野鳥を観察しております。十勝川と浦幌十勝川の間位置し、面積にすると20平方km程しかありませんが、紹介したとおり色々な環境に恵まれていますので、四季折々、野鳥や野の花の観察を楽しめます。機会がありましたら一度足を運んでみてください。

最新の野鳥情報は、浦幌野鳥倶楽部のホームページ
<http://www.netbeet.ne.jp/noro>をご覧ください。

〒089-5617 十勝郡浦幌町字南町3-35

浦幌野鳥倶楽部事務局

クッチャロ湖周辺の観察シーズン紹介

クッチャロ湖水鳥観察館 小 西 敢

日本で一番北にある湖をご存知でしょうか？クッチャロ湖は、稚内市から直線で、約60kmにある周囲27kmの日本最北の湖です。湖は、大沼（長径5.5km）と小沼（長径3.0km）の2つの沼から形成されており、2つの沼をつなぐ水路の最狭部は約25mで、少し変形した瓢箪状の湖です。湖の平均水深1.5mと比較的浅く、最深部でも2.5mしかありません。標高が低いので、満潮時には、約3km離れたオホーツク海から、海水が入り込みます。

クッチャロ湖と聞くと「白鳥の湖」と思い浮かべる方は、かなりの鳥屋さんか観光等で浜頓別町に訪れたことのある人ではないでしょうか。本州方面から来られた来訪者の方の多くは、クッチャロ湖と聞いて「屈斜路湖（くっしゃろこ）」と間違ってしまう場合があります。時々、「クッキーはいますか？」とのご質問を受けるのですが、「クッキーの代わりにコハクチョウがいますよ」とお答えしています。中には、電話で「今、弟子屈にいますが、屈斜路湖まで、車で行くと何分ぐらいで到着しますか？」という問い合わせもあります。

クッチャロ湖と屈斜路湖が間違われてしまうのは、どちらも同じ意味のアイヌ語から名前がつけられているからだと思います。クッチャロ湖の語源は、「トー・クッ・チャロ」と言われ、日本語では「沼から水の流れ出る口」「沼ののどもと」「沼の出口」という意味になります。クッチャロ湖の場合、湖から出る水はクッチャロ川を經由して、オホーツク海に流れていきます。この湖と川の合流点を意味する言葉が、いつのまにか湖全体を指すようになりました。

同じ語源を持つ、2つの湖には、もう1つ共通点があります。それは、どちらも白鳥が飛来する湖と言うことです。しかし、ここで大きな違いが出てきます。屈斜路湖に飛来する白鳥は、オオハクチョウで、クッチャロ湖に飛来する白鳥は、コハクチョウと言う点です。クッチャロ湖には、コハクチョウが春と秋の渡りのシーズンに約15,000～20,000羽が飛来し、湖で羽を休めてから、次の休息場所へ渡って行きます。

日本に飛来するオオハクチョウとコハクチョウは、それぞれ別の渡りのルートを持っていて、特に道内を移動するときは、主に2つの渡りのルートを移動しながら、本州へと渡って行きます。コハクチョウは、北シベリアの繁殖地からサハリンを經由して、北海道の最北に位置するクッチャロ湖に飛来します。その後、石狩山地の西側にある天塩川・石狩平野を移動しながら、本州の越冬地へ渡って行きます。一方、オオハクチョウは、サハリンを經由して、そのまま

オホーツク海を南下したあと、一番初めに濤沸湖（とうふつこ）へ飛来します。その後、道東の海岸沿いにある風蓮湖、厚岸湖を經由し、太平洋側を通して、本州の越冬地へ渡って行きます。大きく分けるとコハクチョウは、道内を縦に移動し、オオハクチョウは、道東を經由するため、曲線を描いて移動します。渡りのルートが分かれている理由は、解明されていませんが、北海道の中央に位置する大雪山から日高山脈までの標高の高い地域を避けて東西に分かれて渡っているようです。春は、このルートを北上して、渡って行きます。北海道内の白鳥の渡りを詳しく調べると更にいくつかのルートが存在しますが、ほとんどの白鳥たちはこのルートを通るため、クッチャロ湖では、飛来する白鳥の90%以上が、コハクチョウとなります。日本には、毎年、約3万羽のコハクチョウが飛来していますが、クッチャロ湖では、その内の50～70%が飛来しています。



クッチャロ湖とその周辺の地図

クッチャロ湖は、国内最多のコハクチョウ飛来地として、昭和43年に北オホーツク道立自然公園に指定されました。また、平成元年には、国内第3番目のラムサール条約（「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」）に指定されています。更に平成11年には、東アジア地域ガンカモ種重要生息地として登録されました。

コハクチョウ以外の野鳥も四季を通じて、湖に飛来してきます。春は、北の繁殖地へ向かうカモ類が多く集まり、オナガガモ、ヒドリガモを中心に約20種類のカモ類が見られます。数は少ないもののトモエガモやアメリカヒドリも毎年、姿を見せます。

カモ類以外の水鳥としては、アオサギやウミウが多く見られ、湖で魚を捕っている姿を見かけます。春先のアオサ

ギは、婚姻色がでているため、クチバシと足が紅色に染まっています。冠羽もはっきりとしています。過去に1度しか記録はありませんが、クロツラヘラサギやソデグロヅルもこの時期に飛来しました。道内で越冬していたオオワシやオジロワシが北上の途中に訪れるのもこの時期で、多い日には、100羽単位で渡ってきます。春の渡りのピークは、4月下旬から5月上旬頃で、ちょうどゴールデンウィークにあたります。



コハクチョウ

湖の北にあるポン沼では、ミズバショウとエゾノリュウキンカの花が見られるようになり、この頃になると特に野鳥の種類と数が多くなる時期です。湖が水鳥だけでなく多数の野鳥達が、渡りの中継地と利用されていることを再認識させられるのもこの時期です。1997年の春には、マミジロキビタキやムギマキ、キマユホオジロ、コホオアカなど道内では、比較的観察例の少ない野鳥たちが、湖畔のキャンプ場や湖畔林で、同じ日に観察されました。恐らく天候などの影響によって、迷行してきたものと思われるが、このようなことが数年に1度の割合で訪れるため、春の観察には特に注意が必要です。

5月中旬になると殆どの野鳥達が渡りを終えて、湖は少しの間、静かになります。この頃になると数は少ないもののシギ・チドリの仲間たちが、水辺に姿を現します。トウネンやハマシギなども、一度に10~20羽程度しか見られませんが、時々、サルハマシギやエリマキシギ、ヘラシギが姿を見せることもあります。

シギ・チドリの姿が見られなくなると湖畔の林では、オオバナノエンレイソウやクルマバソウなどの花が咲き始めます。初夏の訪れとともに小鳥達のさえずりが、湖畔の林から聞こえてきます。ウグイスやセンダイムシクイ、ツツドリ、ノゴマなどのさえずりに加えて湿地で繁殖しているコヨシキリの声が重なります。単材を運んでいるハクセキレイやコムドリ、ニュウナイスズメの姿も目立つようになります。湖では、野鳥の姿が少なくなり、少し寂しい季

節になりますが、時々、ミサゴやオジロワシが魚を捕まえるため、ダイナミックなダイビングを見せてくれます。また、あまり知られていませんが、道北では、オオワシの若鳥が夏越しすることもあります。

6月~8月にかけて、湖に隣接したベニヤ原生花園では、花のシーズンが訪れています。ベニヤ原生花園は、オホーツク海に面した海岸沿いに広がる原生花園で、湖と同様に北オホーツク道立自然公園に指定されています。約330haの面積に海浜地帯、湿地帯、森林地帯などの多様な環境があり、約120種類以上の植物が分布しています。また、草原地帯に生息するシマセンニュウ、マキノセンニュウ、ノビタキ、オオジュリンなどの野鳥も多く観察され、国内では道北だけで繁殖するツメナガセキレイの姿も見られます。

原生花園の北西部にある森林地帯では、オオカメノキ、ツリバナ、マユミなどの低木や高山帯に分布するエゾイソツツジが見られます。北部の丘陵地では、道北では数少ないスズランの群生地も見られ、ナガバキアザミやヒメイズイなどの植物が分布しています。西部の湿地帯では、ヨシを中心とした低層湿地とワタスゲやツルコケモモの分布する中~高層湿地が見られます。ヨシの群落では、サワギキョウ、エゾミソハギ、ヤナギトラノオ、クロバナロウゲなどの植物がヨシの間から姿を見せてくれます。原生花園には、中央にゆるやかな川が流れていて、ここでは、ミツガシワやスギナモなどの水生植物が見られます。そして、中央の川から海岸までの間にある広大な草原地帯では、ベニヤ原生花園を代表

する、ハクサンチドリ、ヒオウギアヤメ、ノハナショウブ、タチギボウシなどの植物が見られます。更に海岸地帯には、ハマナス、ハマヒルガオ、ハマハタザオ、ハマベンケイソウ、ハマボウフウなどの海浜性植物が分布しています。道内でもオホーツク海に面した特殊な気候や風土のため、他では見



ヒオウギアヤメ

れない植物や動物を楽しむことができます。原生花園には、国内で道北にしか生息していないコモチカナヘビが繁殖しており、平成12年には、このコモチカナヘビが町の文化財に指定されています。コモチカナヘビは、爬虫類の中では数少ない胎卵性のトカゲで、クッチャロ湖でも確認されています。7月下旬になるとヘイケボタルが見られるように

なり、幻想的な光を放ち、夏の夜を演出してくれます。

ベニヤ原生花園のハマナスの実が赤く色づき、エゾリンドウの花が咲くようになるとクッチャロ湖では、カワセミの若鳥が餌を捕る練習をしている姿が、見られるようになります。そして、9月下旬～10月上旬、北シベリアの繁殖地で子育てを終えたコハクチョウたちが、次々とクッチャロ湖へ渡ってきます。白鳥の秋のピークは10月下旬頃で、この季節になるとカモ類も白鳥と同様に渡ってきます。広大な湖では、カモ類が数万羽となり、このカモを狙って、オオタカやオジロワシなどの猛禽類が姿を現します。湖畔の林では、マミチャジナイやツグミの姿も見られるようになります。

春と秋では、渡ってくる野鳥の種類に少し違いがあり、クッチャロ湖では、コハクチョウの渡りのスタイルも少し違っていることが確認されています。春の場合は、少しずつ飛来数が増えてきますが、秋の場合は、春よりも短い日数で、飛来数が増えていきます。

12月に入ると本州で越冬するコハクチョウたちは、ほぼ渡りを終えて、越冬地に到着しています。クッチャロ湖で

は約15年ほど前から、コハクチョウが越冬するようになり、現在では、越冬組のコハクチョウたちが、約1,000～1,500羽ほど残っています。オホーツク海に流水が訪れる2月になると湖はほぼ完全に結氷してしまい、氷の厚さも50cm以上になります。気温は、-20℃前後になり、この厳しい環境の中、越冬組のコハクチョウたちは、僅かに残った水面を求めて頓別川の河口付近に集まります。

この季節が一年で一番、野鳥の種類が少なくなる時期ですが、この季節だけしか見られない野鳥もあります。流水が着岸した日は、水面が氷に閉ざされてしまうため、漁港にウミガラスやコウミスズメが避難してきます。最近では、シロハヤブサが毎年見られるようになり、シロオオタカやシロフクロウ等も稀に姿を見せてくれます。また、ギンザンマシコやベニヒワなどの赤い野鳥が、白銀の世界に彩りを添えてくれます。

3月になるとクッチャロ湖の氷が次第に溶け始め、本州で越冬したコハクチョウたちが少しずつ戻ってきます。

〒098-5731 枝幸郡浜頓別町日の出北

シベリアオオハシシギ観察報告

山田良造

まれな旅鳥、シベリアオオハシシギを記録した状況です。

2001年6月15日午後1時10分頃、石狩市八幡石狩川干潟に、渡りの遅れたシギが残っていないかと思いでかけた。干潟は堤防から300mぐらい入った石狩川右岸にある。堤防から降りた付近は、柳、イタドリが繁り、オオヨシキリがよく通る高い声で「ギョギョギョギョシ」と鳴き、エゾセンニュウが「チョッピンチビチヨ」と高い声でさえずっている。干潟までの草原は、ココシキリが「ジッピリリジッピリリチュチュビビ」と、せわしく鳴き、これに負けずとホオアカ、ノビタキ、オオジュリンがさえずっていた。



2001. 6. 18 石狩市八幡 撮影 筆者

干潟は石狩川が少しカーブになった地点に、全長100mぐらいの小さなもので、ウミネコ、オオセグロカモメ、アオサギなどが休憩していた。付近の流木にはウミウが数羽止まっていた。

過日(6月6日)きたときは、オオソリハシシギの夏羽1羽見ているので、もしやと思いつつ干潟を見ていると、ウミネコの近くに「いたいた」。アオアシシギぐらいの大きさのシギが1羽採餌している。

このシギは、オオソリハシシギのくちばしのように、上方に反っていない。くちばしは長くてまっすぐだが、オグロシギのように基部にピンク色が全くない。それにこの2種に比して体が小さい。黒くて長いくちばし、長い足、翼と背の羽に黒斑があり、私は初めて見るシギだった。車から野鳥図鑑を出して識別すると、シベリアオオハシシギの若鳥だった。このシギは警戒心が薄く、20m先の干潟で長いくちばしを泥にさしこみ、ゴカイなどを採餌している。お腹いっぱいになると80m先のウミネコの近くで休憩していた。

次の日6月16日午前10時頃、北海道野鳥愛護会の山口和夫氏とこのシギを見に行く。干潟近くで会員の岸谷恵美子さんが観察していた。このシギは今日も泥の中に長いくちばしをさしこみ、ゴカイなどを引抜くように採餌していた。

6月17日は、私は行かなかったが、会員の樋口さん等5名が午前中に確認したとのことである。

6月18日午前7時30分、このシギを見に石狩川の干潟に行くと、会員の村上トヨさんがご主人と一緒に来て観察していた。このシギは岸から15m先まで寄ってきて、長いくちばしを泥にさしこみ、ゴカイなどを採餌していた。このとき河口の方からコサギが1羽飛来し干潟に降りた。冠羽を後頭部になびかせた夏羽だった。

数日後(6月23日)午前9時30分ころ、このシギが気になり行く。干潟に降りる堤防付近で会員の中正夫妻と一緒にいった。イソシギが巣立ち後まもないとみられる幼鳥を連れて、警戒鳴きをしながら飛びまわっていた。干潟を何回も見渡したが、シベリアオオハシシギはいない。河口の方からチュウサギが1羽飛来し干潟に降りた。付近の浅瀬で小魚を採餌していた。

シベリアオオハシシギは全長33cm。黒色の長いくちばしをもった中形のシギである。オビ川流域、モンゴル、バイカル湖東南部、中国東北地区などに局地的に繁殖地をもち、日本では繁殖しない。海岸や河口の干潟や入江に渡来し、

浅い水中を歩き、泥の中に長いくちばしをさしこんで貝やゴカイをあさる。

日本全体をみても観察記録は少なく、北海道では、1978年8月の春国岱(1)、1980年5月17日の鶴川(2)、1986年8月27日のウトナイ湖(3)の3例しか報告されていないようであり、今回のものが4例目と思われる。(1)~(3)の出典については以下の通りである。

- (1) 高田 勝(1991) 根室支庁管内鳥類リスト、根室市博物館開設準備室紀要(5): 1-19.
- (2) 羽田恭子(1980) シベリアオオハシシギ、北海道野鳥だより(40): 8.
- (3) 加藤喜七(1996) ウトナイ湖サンクチュアリ野鳥情報ノート15年のまとめ, 5 pp.

なお、分布や識別については、日本産鳥類図鑑(東海大学出版会)、日本の鳥550水辺の鳥(文一総合出版)、フィールドガイド日本の野鳥(日本野鳥の会)を参考とした。

〒003-0021 札幌市白石区栄通16丁目4-13

北海道における繁殖期のニューナイスズメの分布

藤 巻 裕 蔵

北海道で普通に見られるスズメ類は、ニューナイスズメとスズメの2種である。図鑑やフィールドガイドでは、ニューナイスズメは夏鳥で森林に生息し、スズメは留鳥で人家周辺に生息していると説明されている。確かに、スズメは住宅地など人間が住んでいる周辺で生活している。しかし、北海道で鳥を観察していると、ニューナイスズメは森林だけでなく、農耕地でもよく見られる鳥である。

今回は、ニューナイスズメについて、観察記録に基づき、具体的に分布、環境ごと・標高ごとの生息状況について紹介する。使用したデータはおもに自分の観察記録であるが、分布図を作成する場合にはこれまでに発表された論文や調査報告書、日本野鳥の会の各支部の支部報(1970年代以降)からの記録も利用した。

分 布

図1は、約10km四方の区画を単位とした繁殖期のニューナイスズメの分布である。観察記録の少ない北海道北部、渡島半島、オホーツク海側では空白の区画が多く、この図は北海道全域の分布を示しているとは言えないが、石狩平野や十勝平野など、おもに平野部に分布している様子がうかがえる。山間部、とくに日高山脈や大雪山系の標高の高

い所には分布していない。

生息環境

調査したのは、679か所である。1か所に2kmの調査路を設け、4月下旬から7月上旬にかけて調べた。調査地の生息環境を、ハイマツ林、常緑針葉樹林(人工林も含む)、針広混合林、落葉広葉樹林、カラマツ人工林、農耕地・林(観察路沿いの環境の20%以上が林地の場合)、農耕地、住宅地の8つに区分し、環境・標高別に出現率(全調査地に

表1. ニュウナイスズメの生息環境別・標高別の出現率(%)

生息環境	調査路数	標高(m)				計	
		-200 400	401- 600	601- 800	801-		
ハイマツ林	11	—	—	—	0	0	0
常緑針葉樹林	11	30	30	0	0	0	18
針広混合林	120	15	21	9	0	0	11
落葉広葉樹林	123	24	29	19	0	0	24
カラマツ人工林	22	13	27	33	—	—	23
農耕地・林	179	60	64	29	0	—	59
農耕地	189	37	78	50	—	—	46
住宅地	24	9	50	0	—	—	13
計	679	39	49	15	0	0	—

野幌森林公園

2001. 5. 6

【記録された鳥】 カイツブリ、アオサギ、トビ、ハイタカ、コガモ、マガモ、キジバト、ツツドリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、ニュウナイスズメ、カケス、ハシブトガラス 以上 36種

【参加者】 小山久一、品川陸生、山口和夫、香川 稔、島田芳郎・陽子・あすか、長尾由美子、蒲浦鉄太郎、吉田慶子、二川敏幸、栗林宏三、霜村耕介、横田通典、西根昭吉・紀子、松原寛直・敏子・綾子、今村三枝子、鈴木繁雄・英子、川村宣子、久志本アイ、寺里美栄子、樋口孝城・陽子、半田孝俊、野坂英三、田宮ひろ子、中正憲佑、高橋良直、後藤義民、花谷 馨・雅子、高橋利道、岩崎孝博、山田良造、大野俊男、成澤里美、大賀 浩、犬飼 弘、井上公雄 以上 43名

【担当幹事】 井上公雄、後藤義民

河口干潟を次世代の子供達に

--- 例会報告に代えて ---

2001. 5. 20 小山内 恵子

鵜川河口は多くの渡り鳥が休憩し採餌する中継地として重要な場所で、特に春と秋は、シベリアから東南アジア、遠くはオーストラリアを旅するシギ、チドリ類が見られ、北海道野鳥愛護会のフィールドでもあります。しかし、この20年間で海岸線が400mも後退し、右岸に点在していた潟湖が消滅し、わずかに残る河口干潟も、危機に瀕しています。鵜川の干潟の面積変化は、1966年の調査では754,300㎡となっていますが、1997年にはわずか52,000㎡になっています。約30年間で干潟の93%が失われ、面積が7%足らずに激減していることがわかります。

私達の「ネイチャー研究会 in むかわ」は花や鳥やホタルなど、自然好きの者達の会です。自分達が自然の中で大いに語り楽しむことがモットーですが、鵜川の自然を見て行く中で、守って行かなければならないことを知りました。会が生まれたのは6年前、正に干潟が危機に瀕している時だったのです。ただ、自分達が楽しむだけではなく、この掛け替えのない自然を次世代の子供達に伝えたいと願いました。

今、何かしなければ干潟が永遠に失われるのは目に見えていましたが、私達に何が出来るのか、ハードルの高い、

雲を掴むような活動でした。けれども、この河口干潟の特殊性を、まず、知って貰おうということになり「東アジア・オーストラリア地域シギ・チドリ類湿地ネットワーク」の参加を願って、シギ・チドリのカウントを始めたのです。しかし、会の誰もがそれは叶わないと思っていた平成11年の大雨の後、避難しているメダイチドリで必要条件をクリアしたのです。私達は議会や役場を動かし、要望書を提出しました。しかし、メダイチドリはモウコメダイチドリとアジアメダイチドリの亜種がいて、野外においては識別が不可能なことが解り、残念ながら見送りになってしまったのです。私達のカウント数はその2種の絶対数を満たしてはいなかったのです。しかし、この活動によって、危機に瀕している河口干潟のことを多くの方達に伝えることが出来ました。

今、河口では2つの施工がなされています。後退した海岸線を復元すべく左岸にサンドバイパスで養浜されています。左岸には積まれた砂はわずかに残る河口干潟を守り、沿岸流によって河口テラスを形成し、右岸の浸食を防ぎます。また、右岸の排水溝に新たに干潟を創出しています。施工は5カ年の計画ですが、エンドレスだと思っています。自然は厳しくて、脆いものです。人の力ではどんなにか復元はむずかしいでしょう。けれども、観察を繰り返して、試行錯誤しながら自然を考える場所であって欲しいのです。そして、いつも、鳥達がちゃんと評価してくれます。

私達にとって、大切な言葉があります。愛護会の故柳沢先生がおっしゃった「1羽の鳥がいなくなるまで、鵜川に通いたい。」なぜ?こんな情熱があるのでしょうか?この言葉を思う度に真摯な気持ちになります。

5月20日の今年の愛護会の観察会は、施工途中の工事現場のような右岸でした。私達といっしょに活動して戴きたい想いから、ハマナスの移植をお願いしました。この干潟の施工に対するアンケートもお願い致しました。中にはこの施工のあり方に疑問を感じているというものもありましたが、「……ここまで、よく頑張りましたね。」と優しい言葉があつて胸をうたれました。いつも心配して優しく見守ってくれている人がいる。この河口にはそんな人達がいるのですね。

しかし、問題は山積みです。なに1つ結果が出ていないのです。鵜川河口を次世代の子供達にバトンタッチしていくために、私達は河口を見つめ、シギ・チドリをカウントし続けたいと思っています。是非、皆さんのご指導、心からの支援をお願い致します。

〒054-0032 勇払郡鵜川町福住町3-144

【記録された鳥】 アオサギ、トビ、チュウビ、ハヤブサ、ヒドリガモ、ヨシガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、コチドリ、メダイチドリ、オオソリハシシギ、チュウシャクシギ、アオアシシギ、イソシギ、キアシシギ、オオジシギ、

トウネン、ハマシギ、ウミネコ、カモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ユリカモメ、キジバト、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ノビタキ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、シメ、スズメ、コムクドリ、ハシボソガラス、ドバト

以上 41種

【参加者】 小山内恵子、深田由美子、住田真樹子、樋口孝城・陽子、川東保憲・知子、松原寛直・敏子、渡辺吉宗・好子、蒲澤鉄太郎・則子、戸津高保・以知子、中正憲倍・弘子、鎌田恵実・さとみ、和久雅男、栗林宏三、遠藤美浩、高橋良直、山口和夫、谷口勇五郎、西川孝義、内田 孝、山田良造、中馬秀普、鷺田善幸、成澤里美、岸谷美恵子、佐藤ひろみ、佐藤幸典、井上公雄

以上 35名

【担当幹事】 樋口孝城、佐藤幸典

残念ながらあいにくのお天気で……

(植苗・ウトナイ)

2001. 6. 3 藤原和子

昨年(2000)の記録帳を見ると、気温は今年同様15℃だが、くもり晴れ風がなくノビタキ、カワラヒワ、ノゴマ、イカル、アオジ、ツツドリ、アカハラ、ショウドウツバメ、アマツバメ、コヨシキリ、オオジュリン、ベニマシコ、アオジ等々、沢山のウオッチングが出来た事が記して有り、今年は空模様が強風下のもと雨もポツポツとしている中でキビタキ、コヨシキリ、オオジュリン、モズ等々の小鳥たちに逢う事が出来、又、戸津さん竹内さんの案内説明で心がなごむひとときでした。年々あっち、こっちで護岸工事だやれなんだかんだと、そっちこっちが穴あけたりうめたてたりで小鳥のエリアが狭くなって来てる状況下で毎回色々な鳥の観察が出来る場所は本当に貴重な事と思います。細く長く小鳥の観察がずっと出来たらと思います。毎回の案内者の方々に感謝いたします。

〒061-0223 当別町弥生53-43

【記録された鳥】 アオサギ、トビ、コブハクチョウ、ヨシガモ、マガモ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、アカゲラ、ショウドウツバメ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、クロツグミ、アカハラ、ウグイス、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、センダイムシクイ、キビタキ、シジュウカラ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、シメ、スズメ、ハシボソガラス

以上 31種

【参加者】 浪田良三・典子、村田静穂、藤原伸彦・和子、戸津高保、高橋良直・美奈子、岩谷美恵子、小山久一、松原寛直・敏子、三船喜克・幸子、中正憲倍・弘子、内山正裕、西川孝義、雪田昭治・久子、登野泰信、竹内 強、後藤義民、石田典治、片山 實、板田孝弘、中馬秀普、高橋

利道、川東保憲・知子、田宮ひろ子、石橋和子、吉田慶子、古川むつみ、蒲澤鉄太郎・則子、渡辺吉宗・好子、岩崎孝博、樋口孝城、屋代育夫、山田良造、川村宣子、田中哲郎・洋子、岸谷皓平、赤沼礼子

以上 47名

【担当幹事】 戸津高保、竹内 強

東米里探鳥会に参加して

2001. 6. 10 葛西幸子

6月10日(日)に初めて野鳥愛護会主催のバードウォッチングに参加させていただきました。生憎の天気でしたが、たくさんの鳥に出会え、またたくさんの方のやさしさに触れた半日となり、楽しく過ごさせていただきました。恥ずかしながら私は、空を飛んでいるものは飛行機とカラスとスズメ以外は皆“トリ”としか答えられなかったもので、このようにベテランの方と御一緒させていただく事で、いまままで知らなかった世界が少し広がったようでとても嬉しく思っております。

この日は雨まじりとても寒い日でしたが、鳥たちは元気一杯!!身近な自然にもたくさんの種類の鳥がいる事に驚きました。カワラヒワ、シメ、オオジシギ、ノビタキ、マガモ、カッコウ、ホオアカ……などなど。双眼鏡に慣れていない私は、皆さんが「あっあそこにいた!」「本当だね。」と見ているのに、捜している間に飛び去ってしまったりで残念な思いも多かったのですが、鳴き声や姿形で鳥を識別する力があれば、楽しみも広がるのでしょうか。

私は昨年(2000)の秋頃より、自然の中で息抜きしたいと強く思うようになり、子ども達を連れて歩くようになりました。子ども連れでの参加で少なからずご迷惑をかけている事もあるだろうに、皆さんとてもやさしく声をかけて下さり感謝の気持ちで一杯です。幸い6才と8才の子ども達も「歩くのはいやだ。もうつまらない。」など時々ぼやきながらも帰りには「〇〇がいたね。」「おじさんが〇〇だって教えてくれた。」と喜んでます。こういう経験が大きくなって心に残り、自然のやさしさやたくましさを感じとれる人に育ってほしいなと思っています。

また機会があれば、是非参加させていただきたいと思えます。

【記録された鳥】 アオサギ、トビ、マガモ、キジ、イソシギ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、アリスイ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、アカモズ、モズ、ノビタキ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、シメ、スズメ、コムクドリ、ハシボソガラス、ドバト

以上 28種

【参加者】 葛西幸子・みく・慎吾、蒲澤鉄太郎・則子、中馬秀普、岩崎孝博、今村三枝子、山田良造、内山正裕、赤沼礼子、小堀煌治、屋代育夫、山口和夫、渡辺紀久雄、登

野泰信、山田甚一・玲子、樋口孝城、松原寛直・敏子、今泉秀吉、高橋良直、戸津高保、栗林宏三、井上公雄

以上 26名

【担当幹事】 渡辺紀久雄、栗林宏三

平和の滝夜の探鳥会に参加して

2001. 6. 16 丸山智司

この度は、山田甚一さんの紹介により、妻と二人で参加した。

他の探鳥会に参加したことがあるが、今回の探鳥会は何故かずっと前から参加している様な、なごやかな雰囲気の中での探鳥会であり、妻共に楽しむ事ができた。

夜の探鳥会は初めてであり、静寂の薄暮の中、不安と期待が入り交じる。

やがて「ブッポー」と哀愁ただようコノハヅクの鳴き声が、遠くから聞こえてきた時は非常に感動した。

道中マミジロ、トラツグミの鳴き声は確認できたが、宮澤賢二のヨタカの鳴き声を、我々には聞きとることができなかったことが残念であった。

次の機会には是非聞いてみたいと思う。

初心者の我々には、鳴き声の聞き分けが難しく、回を重ねなければと思った。

私と妻は、山登りを楽しみとしているが、これからは唯頂上に立つ事のみでなく、近郊の山でも鳥の鳴き声、姿を確認しながら別の楽しみ方ができそうです。

〒064-0822 札幌市中央区北2条西23丁目1-17

【記録された鳥】 オシドリ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、コノハヅク、ヨタカ、ハリオアマツバメ、コゲラ、ヒヨドリ、マミジロ、トラツグミ、クロツグミ、サブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、ヒガラ、アオジ

以上 18種

【参加者】 田宮ひろ子、古川ムツミ、田子元樹、北村 覚、屋代育夫、今泉秀吉、岩崎孝博、柴田一郎、島崎康広、中村 聡・さとみ・ゆうすけ、山田甚一、高橋良直、戸津高保・以知子、江川克幸、山形裕規、福井みゆき、加納昌枝、岡部國雄、井上公雄

以上 22名

【担当幹事】 戸津高保、井上公雄

野鳥探鳥会に参加して

福移探鳥会

2001. 6. 24 赤沼礼子

昨年白石区民講座(花と鳥と水の散歩)を受講し、野鳥の美しさや、可愛らしさ、その素晴らしさに魅せられてしまい、野幌森林公園、植苗ウトナイ、東米里と3回の探鳥会に参加しとても楽しい1日でしたので、今回福移の探鳥

会に参加するのを機に入会させていただきました。この4回の探鳥会で初めて見られた鳥が、チュウビ、カッコウ、モズ、アオバト、シマアオジ、コヨシキリ、キバシリ、オオジュリン等で、もううれしさいっぱいです。鳥合せの時も私は見られなかった鳥や、聞き分けられなかった鳥が多くて残念ですが、出来るだけ探鳥会に参加して覚えるようにしたいと思います。

最近は巣立ったばかりのカラスのヒナを見ることが多く、嫌われもののカラスさえ親鳥の子育ての真剣さ、ヒナ鳥の甘えた声でおねだりをする様子にだんだん好きになってきました。スズメやアカゲラ、シジュウカラのヒナ鳥も見られ、小さなものがなぜこんなにも可愛らしいのかと生命の不思議を感じます。

まだまだ聞きなしも出来ないし、教えてもらわなければ分からないことばかりですので、これからも宜しくお願い致します。

〒003-0002 札幌市白石区東札幌2条2丁目1-38-141

【記録された鳥】 アオサギ、トビ、ウズラ、マガモ、イソシギ、オオセグロカモメ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、カワセミ、アリスイ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、クロツグミ、アカハラ、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、シジュウカラ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボシガラス、ハシブトガラス

以上 37種

【参加者】 松尾実保子、山田甚一、高橋利道、石田典也、高嶋昭英・則子、蒲澤鉄太郎、今村三枝子、田宮ひろ子、岡 薫、佐々木充人、鈴木繁雄・英子、川東保憲・知子、犬飼 弘、山田良造、吉田慶子、武澤和義、樋口孝城、戸津高保、井川修二、西村華子、成澤里美、松中洋子、赤沼礼子、中正憲倍・弘子、中馬秀普、高橋良直、桜井由美、田端昌俊・ひろ子、吉田マツ子、今泉秀吉、小山久一、岡田幹夫、岩崎孝博、川村宣子、菅原智子、柳川 巖、松尾朗、道場 優、井上公雄

以上 44名

【担当幹事】 道場 優、戸津高保

旭岳温泉一泊探鳥会

2001. 6. 30 ~ 7. 1 亀井厚子

この度は体力の無さから不安を感じながらの参加でしたが、友達に励まされ又会の皆様のご親切を受けながら無事終える事が出来ました。姿見へはお天気にも恵まれて空の美しさ、残雪、そしてパノラマに並ぶ山々にまずは「乾杯」でした。山で出会う鳥達の姿に一瞬々々が感激、ノゴマは実に魅力的、ピンズイの囀りも山に良く響いていました。カヤクグリは初見で、もう大満足となりました。プロミナー



旭岳を背景に記念撮影

で見せて頂きありがとうございました。

さらに色とりどりのお花が私達をより一層に楽しませてくれていましたし、皆さん名前を良く知っていて感心するばかり、あの澄み切った空気の中に立たずにいる自分が幸でした。和やかな夕食会では食も進み時間が過ぎました。早朝探鳥では微かな鳥の声も聞き分けるみなさんに又びっくり、経験と日頃の努力が発揮されているんですね。朝食後の探鳥は雨となり残念ながら私は残りました。後半時間があり白樺荘前にてなんとも可愛いベニマシコ親子に暫し見とれる事ができました。そして、この大自然がいつまでも有りますように願いつつバスに乗りました。最後に蒲澤さんや幹事さんの皆さんのご苦勞に感謝致します。ありがとうございました。

〒061-2284 札幌市南区藤野4条10丁目470-7

【記録された鳥】旭岳姿見の池周辺 12:30~15:30

トビ、キジバト、ハクセキレイ、ビンズイ、カワガラス、コマドリ、ノゴマ、コルリ、ウグイス、アオジ、ベニマシコ、ニュウナイスズメ、カヤクグリ 以上 13種

旭岳温泉周辺周遊コース 7月1日 4:00~6:30

キジバト、ツツドリ、ハリオアマツバメ、アカゲラ、キセキレイ、ハクセキレイ、ミソサザイ、コマドリ、コルリ、ルリビタキ、マミジロ、トラツグミ、アカハラ、ウグイス、エゾムシクイ、キクイタダキ、キビタキ、コサメビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、アオジ、クロジ、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、ウソ、シメ、ニュウナイスズメ、ハシボソガラス 以上 29種

天女が原コース 7月1日 8:00~11:30

ツツドリ、アマツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、カワガラス、ミソサザイ、コマドリ、ルリビタキ、トラツグ

ミ、アカハラ、ウグイス、エゾムシクイ、キクイタダキ、エゾビタキ、コサメビタキ、ヒガラ、キバシリ、アオジ、クロ、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、ウソ、ニュウナイスズメ、カケス、ホシガラス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 28種

【参加者】池田ミチエ、石橋和子、板田孝弘、井上公雄、今泉秀吉、内山正裕、大西典子、岡田幹夫、片山 實・慶子、蒲澤鉄太郎・則子、鎌田玲子、亀井厚子、岸谷美恵子、小林紀子、小堀煌治、近藤綾子、信田洋子、志田博明・政子、島田芳郎・陽子、清水朋子、白澤昌彦、高橋良直、高栗 勇、千葉章子、戸津高保、橋爪陽子、道場 優・信子、中正憲信・弘子、広木朋子、村上トヨ、横山加奈子、松原寛直・敏子、山田良造、山口和夫、山田甚一・玲子、山本昌子、柳沢千代子 以上 45名

【担当幹事】蒲澤鉄太郎、清水朋子、道場 優



天女が原コースにて



【宮島沼】 2001年10月14日(日)

春は北へ秋は南へマガンの渡りはこの宮島沼を中継地として繰り返されています。秋はユーラシア大陸の北東地域で夏を過ごし繁殖を終え、9月下旬頃から渡来がはじまりこの時季にピークに達します。春と異なり秋は滞在期間が短く、休憩をとると順次越冬地を目指して飛び立っていきますので、春ほどの大群にはなりません。他にハクチョウ、カイツブリ、各種カモ類やオオタカ、ハヤブサなどの猛禽類、時にはオグロシギ、ツルシギ、トウネンなどのシギ・チドリ類が観察されることもあります。

集合=大富会館前 午前10時

交通=JR岩見沢駅前バスターミナル発「中央バス月形行き」大富農協前下車 徒歩約10分

【野幌森林公園】 2001年10月21日(日)

高山からはじまった紅葉も、中腹から麓へと広がり秋の深まりを感じる季節です。繁殖を終えた鳥たちの中には、早々に南に移動をはじめめるものもあり、秋は春とともに渡りのシーズンです。春から夏へと森を賑わしたオオルリ、キビタキ、センダイムシクイなどの夏鳥もいつの間にか姿を消し、ツグミ、キレンジャクなどの冬鳥たちが姿を見せはじめています。深まり行く秋に落ち葉を踏みしめ、樹の葉の彩りや香り実など、季節がもたらす自然を実感しながら、キツツキ・カラ類などの留鳥に、渡り遅れの夏鳥や、姿を見せはじめた冬鳥などの観察に一日を過ごしてみませんか。

集合=大沢駐車場入口 午前9時

交通=夕鉄バス(文京台線)新札幌駅バスターミナル発「文京台西行き」大沢公園下車 徒歩5分

【ウトナイ湖】 2001年11月11日(日)

愛護会が此処で探鳥会をはじめて30年以上になりました。多くの人たちがこのウトナイ湖を通して鳥との関わりを深めたことでしょう。この時季になりますとほとんどのカモ類が美しい姿で迎えてくれます。

岸辺に集まるハクチョウにオナガガモ、湖面を泳ぎ回るヒドリガモ、ヨシガモ、ミコアイサ、カワアイサ、奥の方にはマガン、ヒシクイなどが群れ、オジロワシ、オオタカ、ハヤブサなども良く見かけられます。寒い時季ですので防寒には十分気をつけて参加しましょう。

集合=ウトナイ湖畔駐車場湖畔側 9時30分

交通=新千歳空港発 道南バス苫小牧行き、ウトナイレイクランド下車

【野幌森林公園】 2001年12月2日(日)

樹の葉も落ち見通しも良くなり、その年によっては根雪になり森は冬の眠りに入るところでしょうか。

キツツキ・カラ類などの留鳥とツグミ、レンジャクなどの冬鳥に、カケス、ウソ、シメなどが主な鳥たちになります。オオタカ、ハイタカ、フクロウなどの他歩いて見ると意外な出会いが楽しませてくれます。

集合=大沢駐車場入口 9時

【野幌森林公園を歩きましょう】

10月7日(日)・11月4日(日)

集合=大沢駐車場入口 9時

交通=夕鉄バス(文京台線)新札幌駅バスターミナル発「文京台西行き」大沢公園下車 徒歩5分

☆いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行います。

☆観察用具、図鑑、筆記用具、昼食、雨具などお持ちください。

☆探鳥会の問い合わせは

011-563-5158 白澤さん宅へ

鳥民だより

☆☆☆ 会員名簿 ☆☆☆

【新しく会員になられた方】

中馬 秀普 ☎063-0850

札幌市西区八軒10条西2丁目

千葉 章子 ☎004-0847

札幌市清田区清田7条3丁目8-13

北村 覚 ☎060-0041

札幌市中央区大通東9丁目1-19

ライスプラザ大通403

赤沼 礼子 ☎003-0002

札幌市白石区東札幌2条2丁目1-38-141

高嶋 昭英 ☎061-1132

則子 北広島市北進町3丁目5-2

五十嵐辰美 ☎065-0015

加代子 札幌市東区北15条東3丁目10

多田千恵子 ☎005-0850

札幌市南区石山東5-7-25

山形 裕規 ☎060-0005

札幌市中央区北5条西23丁目1-10-1005

小西美美枝 ☎069-0834

江別市文京台東町223

真壁スズ子 ☎004-0021

札幌市厚別区青葉町3丁目2-15-301

小菅 久恵 ☎060-0041
札幌市中央区大通東11丁目24-502
ラポール大通東

原 美保 ☎001-0922
札幌市北区新川2条3丁目4-27

大津 啓司 ☎062-0932
札幌市豊平区平岸2条10丁目6-9
興和荘102

長谷 孝一 ☎004-0003
札幌市厚別区厚別東3条7丁目12-3

山川 美香 ☎069-0831
江別市野幌若葉町30-17

猪口 卓 ☎002-8071
札幌市北区あいの里1条6丁目3-4-906

佐々木幸夫 ☎004-0004
札幌市厚別区厚別東4条8丁目4-20

柴山 敏 ☎462-0803
名古屋市北区上飯田東町3-41

高橋 要 ☎074-1275
深川市音江町向陽100

日景 光平 ☎001-0025
札幌市北区北25条西16丁目7-7

富井 裕子 ☎002-0854
札幌市北区屯田4条2丁目4-16

三浦 昌子 ☎063-0823
札幌市西区発寒3条3丁目6-23

長崎かすみ ☎063-0037
札幌市西区西野7条6丁目3-15

村本千洲子 ☎006-0032
札幌市手稲区稲穂2条5丁目9-7

漆原 滋 ☎001-0033
札幌市北区北38条西7丁目
第2ファミリー札幌408

宮下かをる ☎069-0813
江別市野幌町58-7

田崎 誠 ☎063-0036
札幌市西区西野6条6丁目1-20

小林 幸子 ☎004-0864
札幌市清田区北野4条3丁目3-20

ホームページができました

準備中だった北海道野鳥愛護会のホームページがインターネット上に公開されました。以下のアドレスです。

<http://homepage2.nifty.com/aigokai/>

会の紹介、お知らせ、探鳥会開催予定、探鳥会観察記録、「野鳥だより」、探鳥地紹介、野鳥情報伝言板、Photo Gallery、リンク集から構成されています。広報幹事の高橋良直さんが作成を担当し、今後の管理も行っていきます。どうぞご覧になって、ご感想、ご意見などをお寄せ下さい。

北海道野鳥愛護会

北海道野鳥愛護会のホームページによるご案内！

- 会のご紹介
- お知らせ
- 探鳥会開催予定
- 探鳥会観察記録
- 「野鳥だより」
- 探鳥地紹介
- 野鳥情報伝言板
- Photo Gallery
- リンク集
- 更新履歴



このホームページに関するご意見、ご感想、お問い合わせなどはこちらにメールしてください

リンクはフリーですが、事後でもかまいませんから、ご一報ください

2001-08-01 開設 2001-08-01 最終更新



野鳥カレンダーの販売

今年は再生紙を使用しておりますので、価格は1,200円になります。印刷予定部数は70部ですので、早めにお申し込み下さい。

お渡しは11月のウトナイ湖か12月の野幌探鳥会になります。申し込みの時に受け取る場所もお知らせください。

申し込み先 戸津 831-8636
小堀 591-2836

野鳥だより記事などの訂正

◎第124号16ページ、鳥民だよりの写真展出品目録中、山田良造さんの出品が「シマフクロウ、クマゲラ」となっていますが、正しくは「シロフクロウ、クマゲラ」でした。お詫びして訂正します。

◎愛護会設立30周年記念誌（私たちの探鳥会 探鳥会30年の記録）176ページ、協力者のうち、蒲澤鉄太郎さんの苗字が樺沢になっていました。お詫びして訂正します。

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円（会計年度4月より）

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465